

都道府県名

岡山県

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	北房町立北房中学校					
学 年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	0	6	17
生徒数	67	57	75	0	199	

研究の概要

1. 研究主題

郷土への興味・関心を深め、体験を通して生きる力を培う
～ 基礎・基本の充実 と 生活への応用 ～

本校では、この新「学習指導要領」のねらいの具現化策として新設された、「総合的な学習の時間」を、平成12年度より2年間を試行期間として、教育課程に組み込んだ。これ以降、4年目を迎えた本校の総合的な学習の時間は、名称を「ふるさと学習」とし、数多くの実践を積み重ねてきた。その中で培われた、目に見えるもの、目に見えないものを、どう「生きる力」に繋げるかが、校内研修・実践における大きな課題であった。

また、学習指導要領の「ねらい」にもあるように、基礎・基本の定着がなされてこそ、次へのステップが可能となることは言うまでもないが、これまでの研修・実践では、「まず、実践！」を第一として取り組んできたため、日々の学習活動との関連や、実践の整理・指導者側の共通理解（めざす方向性の確認）が、不十分であったことは否めない。そこで、この度の「学力向上フロンティアスクール」の指定をよいチャンスと受け止め、生徒の学力向上を目指すに当たり、本校が体験活動を通して培ってきた「学び方」や「課題解決に向かう姿勢」を生かしながら、教科における基礎学力の定着と体験活動との相乗効果について研究実践することとした。これが、サブテーマである「基礎・基本の充実と生活への応用」の示すところであり、学習指導要領の「ねらい」に合致するものと考えた。（研究仮説）

「郷土への興味・関心を深め、体験を通して生きる力を培う」というメインテーマの下、実践を積み重ねた「ふるさと学習」は、地域の方や保護者の感想、生徒の活動状況からも、この研究の成果を導く場として、また、生徒にとって、最も身近で、身につけた力が発揮しやすい場であると言える。

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年・英語と数学を中心・・・少人数指導・チームティーチング
他の教科についても、学力向上についての研究を進める。

全学年・総合的な学習の時間

[選択の理由]

- ・単元により、多様な指導形態をとる英語と数学を中心に研究を進めることで、指導方法と客観的データとの関係が把握しやすいため。
- また、総合的な学習の時間は、その成果が生かしやすい場であるため。

[研究の重点]

主題にせまるために、下記の点に重点をおいて研究を進めることとした。

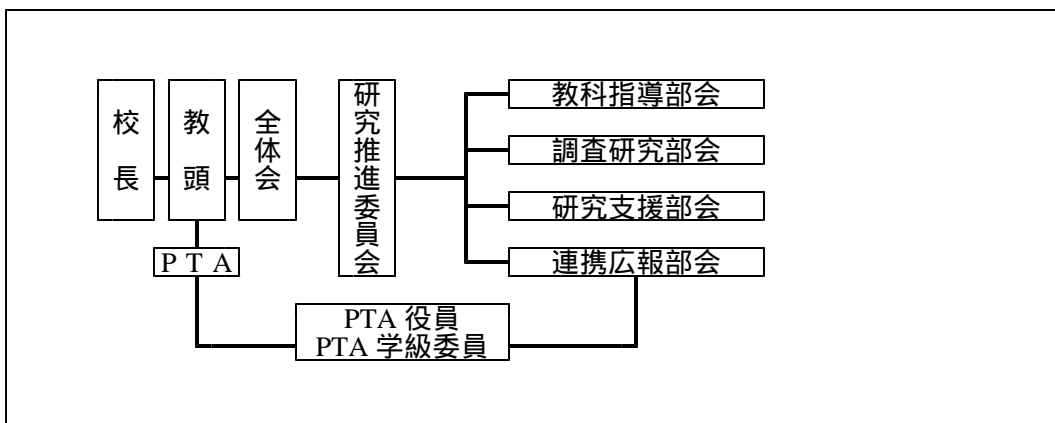
- 1 個に応じた指導法の工夫
 - チームティーチングの研究 少人数指導の研究
 - 各教科における導入の工夫 選択教科における多様なコース設定
- 2 評価のあり方に関する取り組み
 - 評価規準の見直し 「学習の手引き」の作成
 - 自己評価カードの活用
- 3 学ぶ力の基礎をつくる取り組み
 - 学習習慣の定着 基本的生活習慣の確立

(2) 年次ごとの計画

平成 15 年度	<p>テーマ 郷土への興味・関心を深め、体験を通して生きる力を培う ～ 基礎・基本の充実 と 生活への応用 ～</p> <p>研究の見通し</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究を進めるにあたって、本校が掲げた「研究の重点」を各部会が実践することによって、現行の指導方法の効果や問題点が明らかにされ、指導の改善につながるデータが得られるものと考えた。 <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> 研究の体制づくりと各部会による実践の積み重ね 講師を招き、助言を受けるなど、校内研修の充実を図る。 第1回 標準学力検査を実施し、客観的データを得る。
----------------	--

平成 16 年度	<p>テーマ 学ぶ力の基礎づくりと学力の定着</p> <p>研究の見通し</p> <ul style="list-style-type: none"> 「意欲がもてる」「わかる喜びを感じる」「身につけた力が発揮できた」といった生徒の体験的意識の高揚と、学力の定着との相乗効果が、客観的データによって明らかになれば、今後の取組（指導）の方向性が確かなものとなる。 <p>研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> 習熟度に応じた（個に応じた）指導法の研究を重ねる。 総合的な学習の時間など、体験活動の深化を図る。 第2回 標準学力検査を実施し、研究成果をまとめる。
----------------	---

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

<p>(1) 教科指導部会（英語科・数学科を中心として）</p> <p>《実践》</p> <p>英語科 ～スピーチやスキットなどの自己表現活動の重視～</p> <p>少人数指導の利点</p> <ul style="list-style-type: none"> 短い時間でグループ全員が自己表現できる。 指導者が、生徒全員の理解度や表現力を把握しやすい。 パターン練習の効率が上がる。 <p>授業の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 1年生でのリーディング指導の充実（長期休業中の充実）

- ・英語での指示（クラスルームイングリッシュの使用）
 - ・英語で表現する時間の確保（ウォームアップ・スピーク、ピットワーク）
 - ・リーディング指導（ペアによるみんなの前での発表）
 - ・ターゲットセンテンスの導入
（言語の機能と、言語が使われる場面を意識した導入を行う）
 - ・モデルを用いてのコミュニケーション活動（発表）
 - ・スピーキング指導（絵を描く作業を活用した指導、発表）
- 選択教科（英語科）の工夫
- ・コース設定（基礎の A コース、会話を楽しむ B コース、時間をかけて日本文化を外国の人へ伝える C コース）

数学科 ～基礎基本の重視、個別指導、導入の工夫～

基礎基本を重視した授業の実践

- ・授業のはじめの小テストの実施（毎回）
（基礎基本コース 表面・応用コース 裏面 ...生徒の希望で選択）
 - ・昼休みの補充（小テストの結果が思わしくなかった生徒への支援）
 - ・ワークシートの活用（課題をわかりやすく導く手だて）
 - ・計算を助ける教材の活用（ネーピアの骨）
- 個別指導の充実（TTを最大限に活用）
- ・質問の挙手に対する素早い対応...つまずきの早期発見
 - ・3年生3学期での習熟度別授業の展開
 - ・長期休業中の質問教室の実施（一人で取り組みにくい生徒への対応）
- 導入の工夫（新単元の導入時）
- ・パソコンの活用（操作する T・説明する T）
 - ・エピソード（紙芝居）
 - ・TTの二人によるコント

その他

- ・チャイルドティーチャー（生徒による説明）の実践
- ・課題解決や理解の早い生徒への対応（異なる解き方の発見）

《 成 果 》

多くの生徒が臆することなく英語を使って学習に取り組むようになった。

テストの結果から、読み書きの力が確実に向上している。

3年生自己診断テストにおいて、数学では10月の平均点が56.7点に対し、1月は59.8点であった。また、30点以下の生徒は、10月が11名に対し、1月は2名であった。英語の平均点についても、10月の58.4点に対し、1月は58.8点と、わずかながら上昇した。

TTの効果もあって、指導者の素早い対応により、授業に充実感をもつ生徒が多いことがアンケート結果からもうかがえる。

一人で取り組みにくい生徒の、休み明けの課題提出状況がよくなった。

個別指導の充実により、つまずいている生徒への支援だけではなく、理解の早い生徒への支援でも効果が得られた。

(2) 調査研究部会

《 実 践 》

平成16年1月 標準学力検査CRTの実施（1・2年生対象）

「数値化」できにくい学力（意欲や関心）の評価についての研究を、英語数学、国語の領域で進めることとした。

《 成 果 》

本格的な取組は学力検査実施以降となるが、資料収集・検査内容の検討を行う中で、部会内の方向性が少しずつ見えてきた。

教科内だけで検討されがちな、「数値化」できにくい学力（意欲や関心）の評価について、話し合うことができたことは、観点の「重み付け」等、今後の「評価のあり方」にとって大切な意見交換となった。

(3) 連携広報部会

《 実 践 》

「学習の手引き」の作成と生徒・保護者への配布（平成15年度2学期末）

《 成 果 》

本年度は9科目についてのみの「学習の手引き」であったが、今後は研究を重ね、全教科領域での取組を行う予定である。教師（学校）が、子ども達に「どのような力」を、「どのような方法」で身につけさせようとしているのかを、きちんとした形で知らせることは重要であり、「評価の観点」を含め、広報できたことはよいスタートがきれたと考える。

(4) 研究支援部会

《実践》

「朝読書」(朝 8:20 ~ 8:30 までの 10 分間)生徒・職員全員での取組
帰りの会での「5分間テスト」(英・数・国)の実施(2・3年生)
授業はもとより、一定のルールに基づいて、休憩時間もパソコンを生徒が
利用できるようにしている。

担任、保護者、養護教諭、心の教室相談員の連携を大切に保健室登校の生
徒や悩みを抱えている生徒に対する支援(健康面・生活面)を行っている。
緑や花のある校舎を目指し、特にプランターの植物の手入れは充実した。

《成果》

「学力向上」に直接的に関わる活動だけではなく、目に見えない心の面へ
の配慮が少しでも充実したことは大きな成果といえる。

2. 今後の課題

(1) 教科指導

教科指導部会を中心に、体験活動を取り入れながら、試行錯誤の日々であ
るが、今後も、習熟度別学習や確認プリント・自己評価表の活用をさらに
進め、基礎・基本の定着を図る必要がある。

評価の観点を明確にするなど、年間計画を見直し、また、指導案の工夫、導
入の工夫についての研究をさらに進める必要がある。

学力向上を内面から支えるために、次の活動につながる(意欲を喚起する)
評価についての研究を進める必要がある。

(2) 環境・支援体制

サブテーマである「生活への応用」にせまる実践を積み重ねる。

本校の取組に対し、広く理解と協力を得られるよう努力する。

人的・物的・精神的といった多方面から、学力をサポートできる体制づく
りに努力する。

学力把握のための学校としての取組

平成16年1月 標準学力検査CRTの実施(1・2年生対象)・・・実施済
み

平成16年6月 標準学力検査CRTの実施(2・3年生対象)・・・実施予
定

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

平成15年5月29日(木)

「学力向上フロンティアスクール指定校 校内研修兼 北房町教育研修所講
演会」を開催

講演テーマ「確かな学力を向上させる指導法について」

講師・・・岡山大学教育学部助教授 田中 智生 先生

参加者(町内幼・小・中教職員 約70名参加)

平成16年2月下旬 ホームページ上で中間発表を行う予定である。

<http://www.rel.ne.jp/hokubo-jhs/>

平成16年11月10日(水)本校において研究発表会を予定している。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無